

子守唄を神様に

レヴィ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんの因果か、転生しました。自己満足上等な主人公が封神演義の世界で好き勝手やらかします。多少の原作乖離や救済やら、齟齬は見逃してください。

目次

サイカイ	1
デアイ	7
サイキ	15
ユウリ	23
キロ	34
サガス	42
テンメイ	50
キエン	56
オツテ	62
シカク	69
ナタク	74
シセイ	79

インネン

サイカイ

「・・・平和だなあ」

そう独り言をもらしてしまうのも無理はない。これぞ農村と言える窓からの風景に木造の家屋の温かみが視界を彩っている。それに加えて今日は小春日和だ。朝に畑の収穫と洗濯は終わっており、洗濯物はすでに軒下に干してある。もうすぐ時間は正午というところ。長閑な風景に平和だなと思っても過言ではないだろう。しかし、悠悠自適に農村生活というが、一人暮らしというのもあつてやることはたくさんある。

ちなみに両親は随分昔に儂くなってしまった。顔も臍気なくらいだが、少なくとも母親はとても良い人だった。赤子の頃に泣かないにも拘らず空腹やオムツがわかる凄なお人だった。あ、私の名前は姓は黄、字は袴暁つていう東アジア独特の名前ですが誰も呼ばないのでそのうち忘れそうです、ぼっち乙。

「あー、そういえば小川の仕掛けそのままだ」

行きたくないなー、とか愚痴をこぼしつつお昼ご飯の確保のためも渋々外へと向かう。今は晴れているのでぼんやりとしていたいが夕方から雨が降るのだ。チートが告げているから間違いない。雨の増水で仕掛けが流された方が面倒くさいのだ。家があ

るのは小高い山の麓付近で仕掛けのある小川は徒歩で1時間はかかる。雨も降るしさつきと行つて帰ってくるのが一番だろう。

はあ、と溜息を吐きフードを被つて小川までの道を歩き出した。そして仕掛けを放つておけば良かったと後悔したのは、かかった川魚を火で炙つてのんびり昼飯を食べているときだ。

「・・・そうか、このコミックの世界だったけ」

頭に手を当てて眉間に皺を思いつきり寄せる。どれだけ経ったか忘れたが、こんなことを忘れるなんて自分なんて馬鹿なんだと呆れる。魚を採り小枝を重ねて火を起している最中は気づかなかつたが、焚き木をしている近くの130cmくらいある岩の上に黒髪の少年が倒れていた。美少年とは言えないが、そこそこの顔は整っているがどこにもいるようなあどけない少年だ。しかし、見覚えがある。似たような顔は前にも見たが、確か、今は呂望といったはずだ。

どうしたもんかなあ、と悩むこちらをよそに泥と汗にまみれて力尽きたように眠る少年を見る。何分か悩んで原作開始はここから60年は経った後だと思ひ決断した。別に今関わったってさほど影響はないだろうと。それよりこんな人里から徒歩1時間も離れた場所に主人公という名の疫病神とはいえ少年を放置するのは良心が痛む。しかも、自分が生きる理由となつている母の遺言には他人に優しくしなさいというものもあつ

た。普段人と関わらない分、それをここで実行せずにとこでやれという状態だから仕方ないのだ。

というわけで少年を起こすことにした、小川に落として。

案の定、少年は息が吸えないという生命危機に陥って急激に意識は回復した。良い子は真似しないだね。ついでに万が一そのまま溺れたらチートで助ける予定でした、嘘ではありません。

「ごっほ、ごっほ、何がどうなって・・・」

「おー、少年目が覚めた？」

「目が覚めたのって、こっちは死にかけて・・・誰だお前」

すぐさま川の中で立ち上がり、せき込みながらこちらを見つめる目は無垢で生きる光に溢れ自分を映していた。こんにちわ、主人公。とそう心の中で呟きつつ、彼の問いに答えた。たぶん、この時に私は完全な傍観者という立場は捨てたのだろう。ここで生きている、そう今度こそは応えられるようにと。

小川に落とした実行犯と被害者という出会いであったが、この呂望という少年は変わり者だったらしい、何故あれで敵意なく対面できるのか理解しがたい。ちなみに岩の上にはいたのは独りで羊を放牧していたが狼に襲われ、羊は逃がしたがここまで追われて小川に入って撒いたは良いが力尽きて寝てしまったらしい。いや、12歳で狼に襲われて

無傷の方が凄いや、何て言えばこれくらい頭を使えばどうでもなるとのこと。最近の子供はませているな。

あと、私のこの見た目に忌避感がないのは珍しいとも思った。なんせ私は黒髪が良いが金目なのだ。初めて鏡を見た瞬間絶句したのは言うまでもない。なんだ、この金ぴかは。元がこうだからしょうがないが時々物を売り買いに村に行くにも目立つため幻術あるいはマントは必須なのだ。人里から遠く離れ見た目10歳そこそこの女が私なのだ、何で村に住んでないのか呂望に訊かれたのでこの見た目だからと説明したらすぐに納得された。

そうか、やつぱり珍しいのか。下手にこの時代に表に出れば親がいないと分かれば人攫いに遭うから気を付けるようにという母親の言葉は間違いではない。まあ、基本なんでもできるチートだからどうにでもなるけどね。

そんな縁も意外に長く続き、月に2、3回はこの小川の近くで会うようになった。子供と子供が揃うと何をするかって元気に遊びだすのだろうと勝手に思っているが、私と呂望が会うと河原で日向ぼっこをしながら寝るといふ元気さの欠片のない、ありのまま言えば幼げのないことを私たちはしていた。考えてもみろ、10歳前半の、わかりやすく言えば小学生が2人集まってやることと言えばお昼寝だぞ、しかも毎回である。

しかし、それも何回か続けば慣れてきたし、話すことと言っても、やれ大人たちが手

伝えと五月蠅いやら、畑の作物が育たないなど余計に子供らしくない会話をボツボツするくらいで、ほぼ無言である。精神年齢がとてつもない私からすれば非常にありがたいことだった。

そんな日々が突然途切れるのに気づいたのは、いつものように仕掛けにかかった魚を採りに行こうとしたときだった。

河原を歩いていると、嗅えた匂いが遠くからするの気づいた。いつも呂望がまつたりと歩いてくる方向からだ。深く溜息を吐いて、その方向へと足を延ばした。結果はわかりきっていたのに。

明らかに焼けたであろう村には人の存在はなく、既に炭と化しており微かに燃え残っている家の柱や煤ではないこびりついた黒が地面を汚していた。所々に転がる軀は、必死に抵抗したのであろう、農耕器具や鈍器を握りしめられているが無残に折られ、壊され、見せしめのように首を駆られて事切れていた。

〔「最近、大人たちがピリピリしている。なんか軍がどうだとか人狩りがどうとか言つてた」〕

〔「へえ、物騒だね、気を付けてね」〕

〔「お前がだよ。村から離れて住んでる癖に呑気だな。親の顔がみてみたい」〕

〔「めっちゃ美人だよ、私に似て」〕

（「整っているのはわかるけど、残念美人っていうんだろ、それ。まあ、その・・・物騒なことがあるから気をつけろよ」）

（「ハイハイ、心配性だな呂望は」）

数日前に交わした会話を思い出し、荒らされた村から変わらない空を見上げる。

「馬鹿だな、呂望。気を付けるのはお前だって言ったじゃん」

独りでに空に雲が湧き、焼け果てた村に雫が落ち始めた。その雫は自分を濡らさず、地面に染み入っていく。私が村を去るころには雨は上がり、視界には村の存在はなく、周囲に広がる草原と同化しており一際大きい岩があるのみとなった。だってほら、一瞬でこんなこともできるんだよ、私にとつて家や姿を隠すくらいわけないんだから私は大丈夫なんだ。

すでに呂望は元始天尊が連れて行ったのだろう。聡明とはいえ、子供の彼が一人でここからそう遠くへといくことはないのだろうから。

「バイバイ呂望。なるべくなら——もう会いたくないな」

そう一人の帰り道で呟くくらいは許してほしいものだ。

デアイ

「またここか」

ベッドに横たわっていた筈なのに、周囲は青々とした草原が広がっている。

おい、今の季節は冬だぞ。家があるこの辺一帯は高原に近く、冬は雪で閉ざされた世界だ。遊牧民もこの時期はまだ暖かい標高まで下りているが、私は面倒だから下りず、一人寂しくドーム型の世界に引きこもっている。大丈夫、外は一面雪しかないから誰にも見られないし、ドームの中は私の支配下だから周りも気にせずにチートを使えるわけだ。

ちなみにチートと言っても、なにもかもできるわけではない。私にできるのは万物の生成である。そう作り出すことしかできないのだ。つまりはだ、どつかの誰かさんが謳うような全知全能あるいは最強というわけではない。しかし、識っていれば生成できるわけでそれに制限はなく、空間、時間も食べ物も生成できる。時間や空間を拡張すれば異空間の生成や時間の緩急は思いのままである。

ただ、生成できるといっても空間や時間といった概念はともかく、生ものである動植物は発生させることができるのみ、つまり植物を生成しても種しかできない。育てるの

は自分でやるしかないのだ。時間を早めれば良いじゃないか。かかって思われるだろうけど、土に生えていない芽が枯れるように、しっかりと栄養のある土に埋めないと植物は成長しない。というわけで、日がな一日畑を耕して種を生成して撒いて、時間を生成して早めるを繰り返している。閉ざされた空間なのだから尚更これをやるしかない。

そんな面白みのない生活をして、現状がこれである。慣れたいや、慣れてしまつた様子で若干死んだ目で顔を横に向けると同じく草原の上で寝そべる男性の姿があつた。

「・・・太上老君、いや老子。別に誘うのは良いんですが、こつちの都合とか考えてくれませんか。いや暇なのは確かなんです」

正確にはお昼寝しようとしてベッドに横になつた瞬間これである。さて、目が覚めたときはどれだけ時間が経っているのか心配で仕方ない。声をかけたは良いが、目を薄つすらと開けてこちらを見る三大仙人の一人である太上老君は、手足が見えないくらいにダボダボなナイトキャップのようなフード付きの服に寝ぐせの付いた髪を草原に吹く爽やかな風に靡かせながら静かに目を閉じていった、おい。

「一瞬、返事が面倒くさいとかそんな目で見てから寝るな、怠け者」

「何か引つ張つてきたんですか、怠け者の貴方が珍しい・・・って」

「どちらさまですか？」

ちなみにこの時の初対面の印象は互いに、なんか面白そうだったらしい。失礼な、し

かし、道化師・派手・くだおれ人形で容姿の説明がつく彼を見て面白そうなんて思う自分も大概である。現実世界の自分は季節のせいで半強制的な引きこもりだ。娯楽に飢えているのも仕方ない。

そんな彼とのファーストコンタクトだが、自己紹介は大事である。ついでに敵意がないことを伝えることを忘れずに。

「いわゆる天然道士ですか。それなのにここまで力が整っているのは珍しいですね」
「なんとなくてできてたつていう方が正しいです。必要に駆られて」

十歳くらいの子供が一人で生きていける程、この世界は甘くはない。この独特なセンスの持ち主である申公豹もそれはわかるらしく、なるほどと返すだけであった。

「しかし、それだけでは、・・・認めたくないですが三大仙人の一人であるこの人がわざわざ夢に招く理由には足りない気がします」

スヤスヤ眠る太上老君を挟み、こちらを向く眼光は鋭い。おのれ太上老君、私もそこから側にいきたいぞ。この申公豹は原作でもだがどちらかといえば戦う理由や謎の美学が関わらなければ好戦的な性格ではない。トリックスターといえは聞こえは良いが、要は良くわからない人物でもある。年齢も四千越えて最強の道士とも呼ばれており、主人公のライバルみたいな立ち位置だ。関心を持たれたら面倒だけど、敵意を持たれたらもつと面倒である。

「——まあ、今は機嫌が良いのでよしとします」

「はあ」

それはありがたいことで。しかし、傍から見てもこの三人の様子はシニール以外のなんでもないんだろうな、とふと思う。片や派手な道化師、中央は寝ている大きなこども、片や死んだ目をしている女である。ここが夢の中で良かったなあ。

「なんとなくですが、懐かしいというか大らかな気分になれるんですよ、貴女の傍は」
「……ソレはアリガトウゴザイマス」

年頃の女として素直に喜べないが、悪い印象じゃないのは良かった。良かったけどさ、その気分とやらはオカンやら母親に抱くべきじゃないですか、道士さま。

「ああ、そういえば彼が言ってた最適というのはこれのことですか」

「彼、というと太上老君がですか？」

「はい、これどうぞ」

とって、軽い感じで渡されたのは痩せている一匹の白い子猫だった。……ホワツト？

「私の騎獣である黒点虎の妹だそうです。ただ、身体が弱いらしく長らく仙人界で眠っていたそうです。流石に眠るのも限界になり、目覚めたのですが今後は短い生を生きるしかない」と黒点虎が嘆いていたので私が太上老君に相談したら、最適な育てられる人材

がいると聞きまして」

「で、それが私と」

「・・・どうやら貴女の気が特殊なのか、周りの生物も活性化するようにですよ」

ほらご覧なさい、といわれて猫に視点を戻すと白猫はこちらを一心に見つめていた。心なしか痩せ細っていたはずの身体は丸みを帯び、まだ震えている足で私の手の上で精一杯立っていた、しかもか細いが声も聞こえる、・・・アンビリバボー！

「我は白額虎」

「おお、しゃべった」

「力ある霊獣ですからね、ちなみに黒点虎もしやべりますよ」

「我は弱く立つことすら儘ならず。しかし我は誇り高き霊獣である」

「・・・初めて話すのを見ましたが、これ、黒点虎が見たら泣きそうですね。口調とかいろんな意味で」

「感激屋さんなんだね、黒点虎って。それで、どうしたの白額虎」

「貴女を主と仰ぎたい。名を、賜りたい」

どうやら、懐かれたようです。

「これ、主になって良いと思いますか申公豹さん」

「というより、主にならなければ必然的に白額虎は長く生きられません。さつきまで起

きることすらできなかったのですよ」

「・・・おかしいですね、凡人を自称しているのですが」

「貴女みたいな凡人がそこらへんにいたら、もっと楽しそうですが」

そう言いつつ、口元だけ笑みを浮かべる申公豹。確信犯か、畜生。

「——答えを」

と、文字通り捨てられた子猫の目でこちらをみるな白額虎、罪悪感が半端ない。正直、このまま主になると必然的に黒点虎並びに申公豹と縁ができるので原作に巻き込まれる可能性が高い。関わりたくないがそれはずっと昔に諦めているので、気が向くままに自分の好きなようにやろうとは思っている。

しかしだ、最強の霊獣の実妹で、身体が弱いという白額虎を引き取り、私は育てられるだろうか。というより、私は異常性を認識しているからそれに巻き込むのもどうかと思う。霊獣だし、しゃべれるし、私の孤独感を埋めるにはとっても都合はよろしいが、それでも——。って、おい申公豹、こちらの苦悩する様子を見て笑うな、プククとか漏れてるぞ。

「駄目、ですか。我のような脆弱さでは役立たないと」

ヤメロ、私を見つめるな。情に訴えるな。おい、申公豹。黒点虎が嘆きますね、とか私を悪者に仕立て上げるな、原典のお前も大概だぞ。あーもう。

「黄禱暁、です」

「え」

「私の名前です。できれば禱暁と呼んでもらえると助かります」

「禱暁、さま・・・」

「いや、さまはいらない」

「禱暁さま、いえ主さま。この白額虎、靈獣としてしっかりと努めさせていただきます」

キラキラとした目でこちらを見つめる白猫。うう、良かったですね白額虎とハンカチ（どこから出した）で目元を抑える申公豹だが、せめて涙くらい出せ。

そうして、白猫が一方的に騒いでいると、煩いと大きな子供（太上老君）が眩き、一気に現実世界も戻された。本当にこれが用事だったわけね。そうして、いつもどおりのベッドで目を覚ますと、お腹の上に先ほどまで見ていた白猫が転寝していた。・・・太上老君の夢つてどこまで現実に影響を及ぼすのだろうか。

そんなこんなで白額虎との一人と一匹の共同生活がスタートするわけだが、私の生活をみて元々高かった尊敬が崇拜の域に達し、何故か無意識空気清浄機なのか私の傍では病弱な白額虎はぐんぐん成長して、1か月後には見事黒点虎なみの大きな白虎へと変貌を遂げてしまった、何故だ。

そうして白額虎が私を乗せて空中散歩できる頃には、ちょうど散歩していたのか黒点

虎&申公豹に出会い、一悶着あるわけだが、これはまた別の話に。とりあえず、私のボツチ生活はピリオドを迎えて、色々な厄介事に原作開始までに巻き込まれる発端ともいえる出来事だった。

サイキ

青い空に白い雲。目下真下は溪谷だが、これはこれで美しい景色である。

それはさておき、最近私の騎獣になった白額虎だが、ずっと寝ていたせいから外に出たがる出たがる。勝手に散歩して来いとも言いたいが、仙人界と違って人間界は空気が淀んでいらく私という空気清浄機がないと体調を崩してしまう。それもわかっただけで白額虎も自重しているが、精神的にも幼いのだろう。家の中では狭いからと子猫になって窓から空を見上げる後ろ姿を見てみる、可哀そうだろうが。親バカの罵るがい、ウチの子はカワイイ。

「眠りの中でも見ていましたが、実際に風を感じるといのはまた別格ですね」

黒点虎の額の点がないバージョンというか、もうそれは真つ白な化け猫と言わざるをえないのが白額虎の本性なのだが、黒点虎と違い普段は目を閉じており、耳も垂れてる。言ってみればスコティッシュフォールド（特大サイズ）なのだ。千里眼と順風耳の能力は兄と同じなのだが、どうやら能力が強いらしく普通に見聞きするだけで能力が発動し、見えずぎ聞こえずぎな状況のため、セーブするために目を閉じ、耳を垂らしているらしい。いや、可愛いから良いんだけど。

そうして一人と一匹が空中散歩と洒落込んで、いまは西岐の首都豊邑ほうゆうにいる。ここ殷王国は多数の邑く(同姓の一族による都市国家のような集住地)が集まってできており、皇帝が治める中央の朝歌を中心に東西南北に分かれて4人の大諸侯がそれぞれの区画の邑を管理している。中でも西の大諸侯が管理するここ西岐を中心に広がる邑は財政が安定しており、ほかのところに比べて豊かである。治安も安定しているので、目下危険区域な首都である朝歌よりもこちらのほうが観光するにも買い物するにも安心なのだ。ちなみに私が住んでいる家も場所としては西に分類されるため、こちらのほうが近いというのもある。

「人がたくさんいて、活気もあつて楽しそうです」

初対面のときはものスツゴク固い口調であったが、黒点虎の泣きも入ったため頑張つて話し方を強制したのだが敬語口調になってしまった、どこの道化師だ。衰弱していたので、あのととき言葉を話すのも初めてだったらしいが、どうやらあれはどこかの爺さんの話し方を真似たらしい。女の子なのだから、・・・せめて性別の壁は超えないでほしかったよ。

「実質、財政管理がおかしい王都よりもこつちのほうが福利厚生もしっかりしてるし、活気があるのは無理ないかな」

「二度王都である朝歌を視てみましたが、歩く人々はあまり元気がなさそうでした」

「まあ、あそこは魔窟で人の世なのに人外がゴロゴロいるからね。しかも、少しずつだけど鬻りが濃くなってる。盛者必衰、何事も終はあるものだから仕方ないかもしれない」

まあ、人の世だけには限らないけど、と心の中で呟いたのはご愛敬である。さて、現在は原作開始のおおよそ40年前くらい。今はまだ、治世は安定しているほうだが、次の代の王に切り替わった頃からたぶん姐己が顔を出す。今は都の民も元気がないくらいで済みそうだが、その頃には餓死者が出始めたり、貧富の差が如実に出て国は乱れるだろう。

「まあ、暗い話は置いておいて、甘いもの食べたり、買い物したりしよう。初めて見る物も一杯あるだろうし」

基本の衣食住は家の周辺で事足りるのだが、時には要りようなときもある。生成する能力は便利といえれば便利なのだが、前世で知っていることだけなので、この時代の食文化やら文明はさっぱりなのだ。原作もあまりふれていないことだし。そして、今は紀元前11世紀なのだから、日本でいえば縄文時代から弥生時代の合間くらい。まだ見ぬ食べ物か私を呼んでいる。食い意地が張っていると言われれば、そうだろうと答えるだろう。

こつそりと都に降り、白額虎は白猫となつてもらい市街を散策する。この頃の貨幣といえれば貝貨か亀の甲であるが、幾らか持ち合わせている。生成つてこういうときは便利

だよね。

物見遊山して、買ったものを持ちながら家屋がない方へと向かう。別に生成した異空間に放り込んでも良いが、騒がれるのはまずい。しかも、この西岐は大諸侯がいる邑であり、情報伝達も早い。面倒くさいことになることは受けでありである。

そんな危機管理を以てして、河辺に来たのは良いが、原典でも原作でも有名なシーンの場所に来てどうするよ。適当に行つたのがまずかつたのかもしれない。

「大きな川ですな」

「黄河の支流の一つで確か渭水つて呼ばれていたはず。人の暮らしに水は欠かせないからね」

山際を走る大河に滝、一際存在感のある大岩と風光明媚な場所ではある。たしか、前世でもそれとされた観光地があると聞いたことはある。人目もないしもういつそここでやってしまおうかと一応周りを見渡すと、人影が見えた。

どうやら一人のようで、年齢は年若く少年といえるくらいで頭にターバンをしていて、土汚れており動きやすい服ではあるが破れなどはなく明らかに平民の物ではない。そして、狩りでもしていたのか弓矢を背負っていた。

「すまない、邪魔をしたか」

「いえ、たまたまいただけですから」

口調は上品とは言えないが所作の良い佇まい、そしてここは西岐である。嫌な予感しかしない。

「そうか、俺は見ての通り先ほどまで狩りをしていてな」

「はあ」

「事前の占いにも獣は得られないとあつたが、意地になって向かつたは良いが一向に仕留められず、休憩に川に寄つたのだが」

「そうなんですか、私はこれで」

「……ところで、猫が溺れているようだが」

ハツと思ひ振り返ると、ご主人様ー、とか叫びながらどんぶらこつこ流されている白猫の姿が、つておい。

「白額虎、川辺で遊ぶなってあれほどいったでしょーが!!」

純粹な白猫は好奇心旺盛で、最近もお風呂場で溺れたばかりだ。確実に海川でも同じことが起きるだろうと注意していたのにも関わらずこれである。外出禁止令でも出そうかしら。

「いやです、お外で遊びたいです、あーるーじーブクブク」

「あー、もう溺れながら反論しないの、世話が焼けるなあ」

溜息を吐きながら川へと飛び込む、助け出して河原に戻るころには、先ほどの少年が

火を起こして待つていてくれた、面目ない。

「あなたは天然道士で、その猫は霊獣なんだな」

目をキラキラさせてこちらを見る少年は羨望な眼差しをこちらに向けている、やめろそんな目で見てもなにも出ないぞ。助け出した白額虎は本性を現して隣で寝ている。元は身体が弱かったんだ、熱風を作り疑似ドライヤーでしつかり乾かしたとも。そして、気持ち良かったのかそのまま寝てしまった。

「話でしか聞いたことがないことは本当にあるんだ。世界は広い、本当に広い。．．．兄さんたちもどこかで」

どうやらこの少年は父が亡くなり、上には兄が二人いたが父親はこの少年に家督を譲りたいと遺言に残したようで、兄たちは末の弟を残して去ってしまったそうだ。今は周りに支えられながらなんとかやっており、今日はその息抜きだそうだ。護衛だろう数人の気配も森の奥からするし、日も暮れてきた。

「さて、火を起こしてくれてありがとう。そろそろお暇するよ」

「いや、貴重な話を聞かせてもらった、こちらこそ」

そう言つて右手を差し出された。強く輝く意志の籠った目はこれからの動乱に満ちた未来はまだ見えていないが、それでも突き進んでいくのだろう。ふと、その姿に何かがぶれた。精一杯生きていこうとするかつての子供たちの姿が脳裏を過ぎった。私は

こういう目には弱いのだろうと自嘲しながらその手を柔く両手で握った。

「姫昌、私は昉暁という天然道士だ。何ができるといわけではないが、私は貴方をあえて友と呼ぼう。これから信頼できる部下や家族はたくさんできるだろうから、いらないかもしれないが」

原作でも100人という子沢山で家臣にも恵まれていたが、彼の友と呼べるのはいなかった。地位などを度外視しているのが一人くらいいても良いのではないか。こつちは原作に巻き込まれる覚悟は（些か不本意ではあるが）できてる。

そう言うと、姫昌は目を大きく見開いたかと思うと、照れたように顔を赤らめながらありがとう、とにこやかに笑い、私も自然と顔を綻ばせた。

夕日に照らされて手を振る姫昌に見守っていた護衛がこちらに頭を下げるのを真下に見ながら白額虎に横掛け、なお上昇していく。

「良かったんですか、あんな約束取り付けて。相手は若いとはいえ官職、しかも大諸侯の一人ですよ」

「寝ていたのに聞いてたんだ」

「あんな傍で話していたら寝ていても聞こえますよ。で、良いんですか」

「何が」

「主さまは申公豹さまとも最初は関わりたくなさそうでした。太上老君さまとも。．．

誰とも関わりたくないのに、私を引き取ってからですよね。関わりだしたのも」

この霊獣は精神年齢は幼いはずなのに聡い。でもこちらをちらりと見る目はどこか悲しそうでもあつた。

「別に白額虎のせいじゃないよ」

「しかし、」

「元はね、私がいるのはお母さまのおかげで、こうして白額虎に出会えたのもまた縁だと思つたの。何かに縛られるよりその時思つた行動をしたほうが良いと思つたの。一期一会、出会いを大切にしないとね」

原作に振り回されるのは御免だが、たぶん見過ごすこともできないだろう。それから、自分は好きに動いた方が後悔もしないだろう。

「まあ、正直引きこもっていたいけど」

「主さま、最後のそれですべて台無しです」

「酷いなー、本心なただけどなあ」

「なお悪いです」

そんな言い合いを白額虎と家路につくまで続けてた。その後、紂王が即位し、約20年後には殷の地で黄飛虎と閻仲が会おう。そうして、妲己が宮廷に再び姿を現す。時間 は留まることを知らず駆けていった。

ユウリ

「あー、淀んでるわー」

数年前より姐己が再び宮廷に姿を現した。名君と謳われた紂王も姐己の術中に嵌り、意のままに操られる傀儡となつてゐる。ここは紂王直轄の場所とはほど遠いが、近づくと膨大な妖気と微かな腐臭が朝歌から漂ってくるので、国が乱れてゐるのは確かだ。

自宅周辺は亜空間になつてゐるので、よっぽど高位の仙人や申公豹のような道士が来ない限りはこの場所の平穩は保証されてゐる。しかしだ、密かに会いに行つてゐる旧友が最近宴のため、朝歌に向かうと言つてゐた。止めた方が良くと止めたが忠義に篤い彼のことだ、どうせ原作通りに紂王を諫めようとするだろう。長子である伯邑考もこれには頭を抱えてゐた。と言つても、ここで行かなければ紂王の不興を買うことになる。本当に権力とは面倒くさいものだ。

「白額虎、一緒に行つてくれる？」

「はい、主さま。いつでもどうぞ」

白額虎もこの50年ほどで精神面も成長したらしく、川に溺れるようなことはなく

なった。時々、躓いたりどドジをかますことがあるけどそこは個性としておいておく。能力面は兄である黒点虎と並ぶくらいにはなっているが、なにせ元は病弱のため体力面では劣るので、黒点虎が最強の霊獣というのには変わりはない。そして、数十年前からは私と離れても体調を崩すことはなくなつたので、自由に散歩できることは本人が一番喜んでいた。すいませんね、元来引きこもりなんです。

そうして、白額虎に跨り到着したのは何も無い草原に一際大きい岩がある場所、以前には羌族の村があつた場所だ。他者にはただの草原だろうが、見る人が見れば惨劇のあつた場所でもあり、故郷であるともいえる。まあ、遊牧民である彼らに永住する土地という観念は薄いかもしれないが。

「そういうえば、ゆうきょう邑姜も大きくなりましたね」

「まあ、あれだけ経てばね」

——あれは何年前だろうか。

いつも通り、夢の中で強制的に呼び出された太上老君が突然迎えにこいといわれた。溜息を吐きながら気配を辿ってみれば、山岳地帯のなかで羊に囲われ寝ていた。それは予想通りといえそうなんだが、その腕に赤子が抱かれていなければの話である。

スヤスヤと眠る乳のみ子は艶のある黒髪に襜褕のような布を巻かれてはいるが、健康

的な顔色で太上老君の無駄に長すぎる袖口をはむはむしていた。大きい赤子が本当の赤子を抱いている姿はここが草原でなければ平和な光景であるが、今はただただシユールである。

「で、どこから拾ってきたんですか、その子は」

「ぐう」

「眠つてないで、説明して。呼び出したのは貴方でしょうが」

「・・・託された、この母親に」

寝ぼけ眼で覚醒したが、寝起きにしては明瞭な口調で話す彼は珍しく浅い眠りを続けていたようだ。時々うつらうつらをしていたが、話を聞くとどうやら死に間際の母親に無理やり腕に抱えさせられ、この子をお願いと笑顔で言われた後、この場を立ち去ったらしい。強しというが厳かだな、その母親。こんな怪しい人物に子供を託すなんて。

「で、どうしろと」

「この子は羌族キヤウツェク、安全な地が必要だからお願い」

どうやら、この怠け者も託された（強制）身としては育てる気のようなのである。怠惰の権化であり、時間のほぼ、いや99.9%くらいを夢の中で過ごしている彼がこんなことをするなんて、申公豹が聞けば黒点虎から落ちるくらいには驚愕するだろう。そんな私だって原作を知ってなければ何かを作る拍子に手を滑らせてブラックホールくらい

作るくらいと例えるくらい有りえない事なのだ。なので、その話は快諾しよう。しなければ、なんか人間として終わってしまう気がする。

「はあ、こんな願いを叶えるのは老子くらいですよ」

「ありがとう」

そうして、思考を巡らすと以前見つけた物理法則をやや無視している土地を思い出した。気紛れに何十年前に人狩りから助けた村人を一気にそこへ飛ばしたことがある。少し経って行ってみればえらく順応して独自の文化を作り上げている彼らには呆れたが、それこそ女神のように自分が讃えられたのにはドンびいた。

そこへ老子と赤子を案内し、謎の崇拜を受けていることを利用して老子だけではそのうち子育てでも面倒くさがるからその子を育てるように村人にも説明した。そうして何年か経ち赤子が大きくなり独り立ちする頃には、老子は桃源郷から下界に降り、残っていた羌族を率いて村を作ったとその子から聞いたのには再度驚いた。

「しかし、主さま。あの時のことは私も覚えていますが怠惰スーツはやりすぎかと」

「行くたびに数年の汚れを落とし、服を繕う苦勞に私が参った結果だから見逃して」

原作でもあったオーバーテクノロジーで、最強宝具ですら弾く作中最強防御力といわれる怠惰スーツであるが、そりや壊れないという概念を持つもので作ればそうなるだろう。それを作ったくらいだろうか、呂姜を連れてここへ来たのは。彼女にとっては何も

知らない場所ではあるが、ここに花を添えて祈りを捧げていたのは感慨深いものがあった。

「さて、捕まっているだろう姫昌のどこにでも行きますか」

「よろしいのですか、主さま。確か、女狐やら暗君がいるとかで、朝歌へ行くのは避けていたみたいですが」

「まあ、面倒事に巻き込まれるのは嫌だけど、旧友が話し相手もないのがずっと続くのはちよつとね」

姫昌が幽閉されるのは7年間である。その間、何もせずただ傍観するのは無しとして、ただ会いに行くというのもやりづらい。考えてみて、友人が出れないのに悠々と入りできる自分はさぞ滑稽にみえるだろう。しかし、その友人はたぶん自分からは出ていけない、頑固だから。なら、自分も一緒にいるしかない。

「白額虎、あなたは西岐か桃源郷、いつそ申公豹のどこでも行つていいのよ。あそこに行けば限りなく拘束される。もう姐己は私のことも知ってるだろうから、そうおいそれと動けなくなる。そうすれば私は兎も角、あなたまで不自由をかけることになる」

生まれつき病弱で外に焦がれていたため、今になり縛りつけるのは憚られた。しかしその問いに白い霊獣はゆつくりと顔を横に振るつた。

「いいえ、私も連れていってください。主さまに仕えると決めたのは私であり、何より傍

にいたいのです。会ったときのような寂しい目はもう見たくないですから」

この子には私のことを全部話した。その上で今生はずっと傍にいたいと言いつつ、決意は固いだろう。

「・・・そっか、じゃあ行くかうか」

頑固な友人を持つと大変だよね、と笑って二人で姫昌が幽閉されている美里ゆりの邑に向かった。

一見貴族、いや豪族の屋敷といった度合いが相応しいか、荒涼とした土地にある塀に囲まれた広めな敷地内には兵が寝泊まりするであろう宿舎が大きい分、味噌簿らしさが明け透けに見てとれる。しかも、敷地の壁は人の丈より高く出入口や敷地内には兵が闊歩して物々しさを漂わせており、近くに家屋がない分時より道行く人は恐々とこの牢獄を避けて通っていた。

「また物騒なところにいるなあ、姫昌は」

その牢獄の遙か上空、雲の切れ間に白額虎に乗りながら禱曉は目を細めた。現在この二人は指定した人物以外には姿を隠し、防音、果ては気配まで遮断する宝具（禱曉ちゃんお手製）を使っているため、二人の姿はあからさまに透けており、向こう側の景色が見えるほどだ。ちなみに使っている互いの姿かたちや声は普通に見聞きできる。しかし、この宝具はその人物を空間から切り取っているようなもので、空間把握に優れ

る宝具などには効果がないのが残念である。

「で、主さまどうしますか。このまま行ってもここには仙道は居ないみたいですし、見つかることはないと思いますよが」

そう、周りにいるのは一般兵であり、妲己が関わる妖怪仙人らしきものはいなかった。国を背負っている姫昌の性根から言って脱出しようとは考えなさそうだが、もう少し戦力になるマシな奴らをつけてはどうかと思つたが、こちらには好都合である。

「ただこのまま行つても、何も無い空間に話しかける姫昌ができあがるだけだから、もう少しどうにかしたいなあ」

仙道が関わっていないとなると、傍目から見ればただの痛い人物である。友人としてはなんとかして避けたい。そう、なにもない空間で話さなければ良いのだ、なにかこう話しかけても誤魔化せるような、幽閉されても存在が許されるような……あー。

「よし、鳥になりますか」

「なんか、それだけ聞くとおかしい人物みたいですよ、主さま」

仙道なのだから姿かたちをかえるのはお手の物、いや、変化の術が使えるのは片手に数えるくらいで、多くは妖怪仙人くらいだがそこは置いておく。白額虎は白猫になれるし、動物なのから多少声をかけても怪しまれない。え、幽閉されているのだから、動物一匹入れないってか、周囲に暗示をかければ大丈夫でしょ。まあ、女狐が見に来る可能

性もないわけではないが、それは許容範囲だ。

そうときまれば、認識障害の宝具を発動させながら姫昌が幽閉されている建物へと向かい、こつそりと格子一つ分の紙を破った。この時代硝子とかはないから外から日光を取り入れるには、窓板を開けるかこうして紙を貼り障子のようにするしかない。防犯を考えれば雑と言えば雑と言える。

鳥になり部屋を覗くと中はがらんどろで、必要最低限の物しか置いていない。そこに姫昌は中央にある椅子に座っていた。目を閉じて、幾分か疲れているようにも見える。試しに普通の鳥のように鳴いてみる。すると、音に気付いてゆつくりと目を開いてこちらを見る。意志の強い温かな眼差しは変わっていないようで、少し安心した。

「おお珍しい、お客人かな」

笑い皺を携え、穏やかな物腰は動物相手でも変わらないようだ。ふと心笑うと、静かに羽を動かし、姫昌の前にある机の上に降り立った。視界の端で白猫になった白額虎も部屋に入ったが、その後毛づくろいをする姿はとても霊獣に見えない（誉め言葉）。

姫昌の方をじっと見つめるとなにかに気づいたように、彼は苦笑した。

「まったく、私の友人は心配性ですね」

「・・・いつ気が付いたの」

「姿は目に鮮やかな色鳥ですが、目は変わっていませんよ」

今の私の姿は、頭は黒で羽は緑、腹が朱色というグラデーションでサイズは雀程度だ。ケツアールを参考にしたのは言うまでもない、雌の方だが。だが、目は元のままの金色なので、気づいたとのこと。付き合いも短くはないので余計かもしれないが。

そうして会話をしている姫昌の顔は優し気に緩んでいたが、挨拶が終わると途端に真剣な顔になった。この切り替えの早さは為政者として評価するべきところだろうか。

「朥曉、私は紂王の反感を買い、ここに幽閉されているのは知っているね」

「知らなければここに来ない」

「そうでしょう。私はそれを承知の上でここにいます。貴女は、縛られて良い人ではない」それは人格、能力のことも差しているのだろう。主に西の邑で色々やらかしているのは否定しない。自由気儘にマイペースな私がここにいるのは苦痛だろうとも示唆しているのだろう。

「それも承知でここに来た」

「しかしッ」

「姫昌、君は私より早く逝く。私は天然道士だから、長命は確実だ。だから、短いからこそ、一緒にいたいというのは我儘かな」

それこそ、彼がいるときは本当に好き勝手していた。

彼の領地に無許可で水脈を探して池を作ったり、彼の二人目の子が産まれたと聞いた

ときは、その母に許可を取つて姫昌には知らせず一人目の子と一緒に白額虎に乗り冒険した。そういうえば、いつだか大量の難民を引き受けたときは、自分たちの食料を減らしまで引き受けていたから本人を叱りつけて、子供にはもつと食わせると畑を私自ら耕していた。チートも使つていないのにめちや豊作だったから、姫家総勢で収穫祭をやつたこともあつた。思い返せば、なにやつてんだらう私つて……。

そうして、回想とともに自分の行いに後悔を滲ませていると、黙つていた姫昌が急に大笑いし始めた。外にも聞こえたようで、気が触れたかとか役人さんが言つてますが良いのですか、姫昌さんや。

「いつも突拍子のないことをして皆を驚かせているが、なにかを想つて行動するのは変わらないな」

「成長しない私ですみませんね」

「いや、それに救われる自分もいた」

懐かしむように目を閉じる彼は、来る前の疲れた様子ではなくいつもの、西岐でみる姿だった。

「いつまでかわからないが、付き合つてくれるか?」

「勿論ですとも」

そう和やかに話すころには、いつの間にか白額虎は小鳥の私を包むようにして寝そべ

り、欠伸をしていた。彼の幽閉されている7年間を原作では記されていなかったが、一人座る椅子の傍らに鳥と猫を追加してほしい。彼は少しは穏やかに微笑んでいるだろうから。

キロ

時は流れ、幽閉生活も中頃を過ぎたであろう今日この頃。日がな一日、会話が読書、瞑想するかで過ごしてゐる姫昌と私たちです。いや、それやつてゐるのは姫昌だけか。

「それにしても姫昌、いつまでここにゐるつもりなの」

「紂王の許しを得るまで」

「はあ、やつぱり律義というか、ここまですぐと頑なね」

「主さま、自分の事は柵に上げていませんか」

一人と二匹は今日も今日とて幽閉されています。最近では幽閉生活の慰めとして飼われていることが周知されてきた鳥こと袴暁と猫である白額虎ですが、正直暇で仕方ないです。仙道がまつたくここにはいないと知った今では、私は時々マイホームに帰って畑を弄る毎日ですが、代わり映えのしない生活というのは予想以上に精神にくるらしく、姫昌の白髪が目立ち始めた。そろそろ潮時だろう。

「ねえ、姫昌」

「どうした」

「もしここから出れば結果、貴方とあの子の死が回避できるって言ってもここを出ないの」

そのうち、例の事件は起こる。あの真面目な伯邑考の事だ、姫昌が捕らえられていると知つていれば必ず来る、忠告してもそれは変わらないだろう。実の父の言つたことも捻じ曲げてくるくらいだから、その頑固さはこの父親譲りだ。

その言葉に姫昌は目を見開くが、その驚きとは裏腹に穏やかな口調で諭すように話し始めた。

「私は西伯候であり、その責務がある。紂王に物申したのだ、極刑にならないのは破格の扱いだ。何より、友である其方を脱獄を助けたという汚名を着せるつもりはない。：：ありがとう、禱暁。わかつているというのは酷ではあるうが、見守ってほしい」

そういわれてはどうにもできないと私は悟つた。こういうときに動ける人は羨ましい、私は彼の言葉を捻じ曲げたくないという気持ちで勝ってしまった。長年、見続けたせいだろうか、その生を、意志を全うしてほしいと願うのは我儘だろうか。

「はあ、姫家は貧乏くじを引きすぎ。こんな便利な私がいるのに使わないなんて」

「友であるからこそ、ですよ」

「はいはい、わかつてますよ。で、さつきから聞き耳立ててるその人、さつきと入つてきたらっ」

話し始めてからだろうか、様子を伺うように入りする戸の横壁に佇む人の気配があった。仙道のようなだが、整っていない気なので、天然道士か未熟な道士くらいなのが、その気が大きすぎる。只者ではないことは確かだ。

その呼びかけに反応したのか、大柄な人影が木でできた頑丈な扉を開けた。目に入る金髪と無精ひげの快活そうな人相、姐己よりこちらが来たかと内心思った。

「姫昌どのがご乱心したと聞いてな。関わった者として心配して様子見に来たわけだが……、とんだ鼠が入ってみたいだなあっつ！」

——振り降ろされたのは武成王、黄飛虎の棍で、とつさに鳥から人に戻り、咄嗟に青龍偃月刀の柄で防いだ。なぜこの武器かっていうと、言ってしまうえば父の形見です。これ普段使いには大きすぎるし、いくら天然道士としてこれくらい（20 kgほど）は軽いとはいえ私みたいな女子が振り回して良いものではない。

咄嗟だったため、足元にある机が凹んだが岩を砕く一撃を防いだにしては犠牲は少ない方だと褒めてほしいくらいだ。しかし、防いだと分かるや2撃目の横払いが来るとは流石は武成王、容赦ないなあと思いのほか冷静に判断していたら、姫昌が机を大きく叩いた。

「やめんかッッ!!!」

相当な気迫で持つて放った言葉は私たちを止めるのに十分だった。

ついでに武成王の後ろで爪を振り下ろそうとしている白額虎も止まった。その爪は一本一本が太刀のようになっており、以前偶然出会った妖怪仙人が細切れになり思わず手を合わせてしまったのは記憶に新しい。その爪が武成王の頬に刺さり、血と共に汗も一筋流れた。

「武成王、その者は長らく共にいる私の友だ。そして、白額虎もおさめてくれるか、彼は悪いものではない」

武成王は静かに構えを解き、私が力を抜くとやつと白額虎も爪をおさめたが、毛を逆立て威嚇は止めていない。主人思いの霊獣で私は幸せだなっといけない思考が逸れた。凹む机の上からするりと降り、武成王の正面に立つ、見上げる彼は警戒をやめずにこちらを見ていた。青龍偃月刀、長いから青龍刀で良いやを床に静かに横たえ、目を見ながら口を開いた。

「私は姫昌の旧友である天然道士の袴暁と申します。この頑固者が幽閉されていると聞いて付き合っている次第です。そして、名高い武成王で知られる黄飛虎さまにがこの友を救つたと聞きました。ご無礼をお許しを、そして感謝を」

ゆつくりと頭を下げれば、姫昌と白額虎から驚きの声が出た。おい、お前たち、私だつて頭は下げろぞ。恨みがましく頭を下げながら二人を睨みつけると、頭上から噴き出す声が出た。

「ぶ、はははっ。姫昌どの、俺の心配は無粋だったみたいだな」

豪快に笑い、痛いほど背中を叩くそれは体育会系によくあるようなフランクさだ。よく話せば、市中に姫昌が慰めに動物を飼ったは良いが、人間に話しかけるような口調のため遂に狂ったかと噂が広まっているようである。それを心配した黄飛虎が様子見に来てみたが、なんか動物が話しているし、姐己の回し者かと思つたらしい。それはそれで物理で話をつけるものどうかと思うけど。そうして黄飛虎のフランクさも相まって、話が弾んでいるとふと黄飛虎が青龍刀を見やった。

「ところで、その青龍偃月刀どこで手に入れたんだ？」

「あー、継いだものって言った方が良いかな」

「なら、俺ん所の関係者か。それ、黄家の家宝の一つで、確か曾爺さんの義兄弟が持つていったって聞いたが」

・・・よし、整理しよう。私の母はいわゆるシングルマザーで私を産む前に父親は既に他界していた。そして、この青龍刀は父親の形見で、なにやら母の家から譲り受けたと聞いた。父親は当時の皇帝の寵愛から母を逃そうと身体を張り、自害したらしい。そして、重要なのが、私の姓は黄である。そして母からはその家は兄が継いだと聞いた。

思い当って頭を抱えると、飛虎は訝しげにどうしたんだと目線をこちらにやる。たぶん、嘘言つても勘づきそう、だって黄飛虎だもの（確信）。

「……あー、初めまして従弟違殿」

「は？」

「私は黄袴暁で、貴方の曾おじい様の妹の娘です。よって、私たちの関係は親戚と思われ
ます、どうぞよろしく」

「……マジか」

白猫となった白額虎と戯れていた姫昌も固まる事態となった。そつかあ、黄家の姫君
か、母様。そりゃ、仙人骨に恵まれてるわ、山奥で暮らせるわ、にしては所作に厳しい
わけですな。……姓が黄っていうことで嫌な予感がしましたが、産まれたときから
原作巻き込まれフラグはあったわけですね、トホホ……。

このあと、黄飛虎の尋問に会い、んじやあ妹分だなといわれ、実年齢を言うと驚かれ
て、じゃあ姉貴分だなと明るくいわれた私はどうにでもしてくれと遠い目をしてしまっ
た。

そんな日々も過ぎて、来てほしくない時が来てしまった。

懐かしい気配を近くに感じて、姫昌に声をかける。わかつたと目を閉じて静かに座し
ている姿は覚悟を決めたような面持ちだ。彼には話した、そのうえで離れていてほしい
と言われてはどうすることもできない。そつと、白額虎と共にその場を後にした。向か

うのは朝歌だ。朝歌に彼がいることは気配でわかる。誕生にまで立ち会ったのだ、その気配が薄らいでいるのもよく分かった。

夕方には朝歌に着き、禁城の外れを宝具で姿を隠しながら進んでいった。血なまぐさい牢屋の一室に彼はいた。四肢はなく磔にされても尚、息が微かにあるようだが致死量は超えている。牢の扉は空いていたため、そのまま入るが進むたびに水音が跳ねるように音が鳴るのが煩わしい。近づいてそつと顔に手をそえるがその人肌はすでに冷たく無機物を触っているかのようだ。その霞む目はこちらを映さず、焦点は合わないが、それでもそつとその身体を抱きしめた。

「帰ろうか、伯邑考」

この時、幻聴であろうか仕方のないな、姉さんはと聞こえた気がした。

そしてその息が途切れると同時にその体から魂魄が抜け出て、天井を突き破って月明りの空へと向かった。それを見送り、軀を抱きしめながら私は牢屋に火を放った。放ったといっても、床に広がっている赤に火がついただけの話だ。燃え盛る火は私には移らず、ただその痕跡を失くすかのように燃えている。

「あらあ、火事かと思っただけど違うのねん」

その声に思わず殺気が漏れたのだろう、姐己の動きが少し止まった。

「怖いわねえ、初めて見る顔だけど・・・どこかで会ったかしらん？」

たぶんそれは母の事だろうとあたりを付けたが、そんなことはどうでも良い。そつと抱いていたものに念じて異空間へと送る。故郷の地に還した方が良いだろうから、姫昌が西岐に戻ったら葬儀でも執り行おうと思う。でも——、

「無視するのん、酷いわねえ。ああ、彼が言つてた姉さんつてあなたの事ねん。ずっと唸りながら言つてたわ、父上、母上に姉さんつて。もう、叫び声も上げないで耐えているから楽しくて楽しくて」

「ねえ」

私の心も——、

「あらん、やつと反応してくれたわね」

「罅らないでくれる?」

限界だったみたいだ——。

その夜、禁城の外れに大穴があいた。姐己は無事だったらしく見回りをしていた兵も無傷であったが、その場を切り取ったかのように寸断された家屋と地面は誰しもが気味悪がった。

その後私は、馬を引き連れ西岐へ戻る姫昌に追いついて、無言で付き添った。関所を越え西岐に入ったときに一言だけ私が彼を弔おうと言うと、彼は無言で涙を流した。私の前で涙を見せたのは、これが最初で最後だった。

サガス

伯邑考の葬儀は身内で済ませて、緘口令を引いた。紂王に罪人とされたのだ。紂王から身柄を渡されたわけでもないため、公けに葬儀を行うのは拙い。西岐は知らぬ存ぜぬで通し、空の棺で葬儀を済ませたと報告した。唯一私を目撃した妲己もこの件に關しては閉口しているようだった。

月日は幾らか過ぎ、西岐に姫昌が戻ってきたことも周知されつつある。今朝、姫昌は次男と四男である姫発と周公旦を連れて豊邑を見回つてくると聞いて、西岐城で歸りを待つていたわけだが、何故か姫昌は擦り傷だらけで姫発と苦笑いをしていて、周公旦は一人憤っている。

「姫昌、なんかボロボロになっっているけど・・・」

「暁姉上、聞いてください！」

「わかった、わかったから旦那。ちよつと落ち着いて」

周公旦とかいつまんで姫発から話を聞くと、どうやら少年が爆走して姫昌を突き飛ばし、怪我をさせたため少年は速攻土下座で謝り、姫昌は許したが決まりに煩い周公旦が罰を受けるべきと少年を牢へ入れたとのこと。

「且、法に従うのも重要だとは思うけど、子息とはいえ大諸侯である姫昌の決定を遮って意見を通すのも法に触れるからね」

「う・・・」

「そもそも紂王が乱心している今、法とか民に示しがつかないとかは現状その中心が機能していないのだからあまり意味がないのよ。しかも相手は少年、反省もしている前途ある若者を罪に着せるとか鬼畜の所業よ」

「ぐッ」

段々とダメージを受けてしよげる周公旦を姫発は呆れるような目で見ている。いつもとは逆の構図だから面白いといえそうだけど、周公旦は根は善人だから後々自分の行いに胃を痛めることになる。こういうときは伯邑考がフォローを入れるんだけどなあ、幽霊になって出てきてほしいくらいだよ、本当に。

「姫昌はその少年、武吉を釈放するってことで良いのかな」

「ああ、そのつもりだ」

「反省って意味も込めて一晩牢屋にいてもらうってことにすれば良い。その方が民も納得しやすいでしょ」

姫昌は穏やかに許すなんて言うもんだから余計に周公旦は許せないのだと思う。ああ、武吉に怒っているというわけじゃなく、軽く見られていないかかってことについてね。

この情勢だから余計にそう思うのもわからなくはないが、西岐でそんな目で見る人はいないと思うけどね。

「しかし、」

「旦那もそれくらいにしるよなあ。おやじとあねきの決定に逆らうのもどうかしてるぜ」
「ぐぬぬ」

そうして姫薨が周公旦を諫めていると、少し離れたところから大きな破壊音がした。ついでに、仙道の気配もするので、おそらく彼が来たのだろう。何事かとその場にいる全員が音のする方に視線をやっているとそう時間が経たないうちに、兵が一人やつてきて頭を垂れる。牢が壊され、武吉が逃げ出したとのこと。姫昌の指示で数人の兵で無理のない範囲で追跡するように依頼して、その場を解散した。

その夜は満月が大きく照らしていた。豊邑も昼間の賑やかさとはうって変わって民は眠りにつき、静けさが満ちている。なんとなく懐かしさに浸りながら月夜でも見ようと白額虎に乗り上空を満喫していると、見知った二人があらわれた。

「久しぶりですね、晝曉に白額虎」

「白ちゃん、晝曉ちゃん久しぶり〜」

無表情で口角と片手をあげて挨拶をする申公豹は兎も角、黒点虎は白額虎の頬に額を擦り付けるのは止めた方良いと思う、白額虎がイライラして、あ、引つかかれた。それ

でもニコニコしている黒点虎に白額虎は明らかに引いている。

「これは黒点虎の自業自得ですね。いい加減妹離れしてほうが良いとあれほど言っているのに」

「大丈夫ですよ、白額虎のあれは半分は照れ隠しです」

「そして、半分は鬱陶しいと思っっているのですね」

「・・・その通りです」

会うたびに、身体はどうだ元気になっているかは兎も角、猫を撫でまわすようなスキンスリップに呆れているのは間違いない。いまだに妹可愛いを全身で表している黒点虎を放っておくようで、申公豹はこちらを見た。

「そういえば禱暁、珍しく怒ったみたいですね」

「なんのこと?」

「あの禁城でできた大穴は、貴女のせいでしょう」

そういうえば姐己にキレたときかと思ひ浮かべる。よくよく考えれば、制約はあるものの創造の力がある（外聞は宝貝としている）が、消失を創造するって方向に力を使ったのはこれが初めてかもしれない。

「そうだといえ、どうなるの。姐己に私のことでも密告する?」

中立、いや客人とはいえ申公豹は姐己側の仙道だ。何を企んでいるかは知らないが、

姐己は黙秘しているようなので、これが聞仲やら果ては元始天尊に知られると面倒くさい。その問いに、申公豹は心外なという面持ちで首を横に振った。

「いいえ、そんな私の美学に反することはしませんよ、ただの知的好奇心です。思えば、貴女が力を攻撃に回したところをみたことがないので、珍しいと思つた次第です」

「以前に説明したとおり、私の力は攻撃できないからね。何なら全部教えても良いけど」
「それでは面白くないのでお断りします。それに今日来たのはそれだけじゃないので」

ふと下を見る申公豹の目には西岐城があり、今は夜でもあるので静かだ。どうせ物見雄山をしに来たのだろうが、御年5千歳の考えていることを私に考察しろというのが無理なことだ、つまりわからん。

「ところで話は変わりますが貴女、姐己と交友でもあつたのですか」

「は？」

「いえ、姐己が貴女に似た人相の女性を探すとか言つていたので。まあ、私は客人ですし、どうでも良いのですが」

「・・・ありがとう」

「いえ、気にしないでください」

彼にしては珍しく（たぶん）忠告をしてきた、律義なものである。その殊勝さをどこかの誰かにも見習つてほしいくらいだ。そうして、申公豹とは別れたが、黒点虎はずつ

と渋っていた。白ちゃん白ちゃん五月蠅いから最後は申公豹に拳骨を落とされるほどであった。・・・黒点虎、申公豹の言う通り妹離れしようぜ。

そうして、一夜明けると次は西岐城で道士が器物損壊で捕まり、すぐに釈放されたと噂が広まった。

ああ、気が重い。嫌な予感もしたので、城内でこそこそしていると姫昌に捕まった。そう、この西岐城の主である姫昌である。原作の名シーンとなる場所にこれから行くであらう姫昌にだ。

「禱暁、これから道士に会いに行こうと思う。共に行つてはくれないか」

「姫昌、西岐は安全だし、1人で出歩いてても大丈夫でしょ」

「周公旦たつての願いだ。一緒に行つてくれるな」

「・・・ハイ、ワカリマシタ」

姫昌、断言しないで断れないから。

そんな強硬手段に屈した私は姫昌と渋々と豊邑の街へと繰り出すこととなった。考えてみて、衣食住を握られている私はその城の最高権力者に縋りますよ、ええ。

ついでに白額虎は西岐城でお留守番です。彼女には周公旦の癒しとなるべく派遣した。彼はあの見た目で動物好きだ。白額虎の可愛さに彼はそのお堅い顔を緩ませることだろう（親バカ）。

「すまないな。本来ならこういうことに巻き込むのは本意ではないのだが」

民たちに代わる代わる挨拶されながら目的の人物へと歩みを進めるが、人気のない道に出たとき、彼にしては覇気のない謝罪をしてきた。

「今更よ。どうせ私も好き勝手動くわ。．．．それに、迷っているんでしょ」

「わかるか」

「姫昌、何年の付き合いと思つていられるわけ。幽閉期間も一緒にいたくらいで何が貴方に起こつているのか間近でみている私が考えつかないわけじゃないでしょ。それに、私はすでに姐己に喧嘩を売つたみたいなものよ」

「しかし、それは伯邑考が。そしてそれは西岐の問題で」

「あのねえ、赤ちゃんだった頃から世話していたくらいなのよ。それを無残にも故郷にも返さないあちらの行為に、私が怒らない道理はないでしょう」

そう、私は個人的に怒っているのだ。紂王の暗君さや姐己の残忍さで世が乱れるのは正直どうでも良い。でも、私の守るべき領域を侵されて黙っているわけにもいかない。今の私はそうなのだから。

決意が固いことを知つたせい、姫昌はそれ以上は何も言わなかった。ただ、諸侯であるからこそ、友である私が巻き込まれている一種の罪悪感に駆られているようだ。本当に、真面目というのかなというか。

「・・・すまない」

「違うでしょ」

謝罪の言葉なんていらなかった。

「・・・最期まで付き合ってくれるか」

「勿論、私は友情にはトコトン厚いわよ」

それこそ、本当に最後まで、この物語の終わりまで付き合おうではないか。

そうして再会した。物語の主人公に。

テンメイ

雄大な滝が流れ幾重にも流れ、壮大な瀑布から飛沫が散る。その滝壺からほど近い岩場に彼はいた。二人で話させてほしいという姫昌の言葉に従って、私はその一際大きな岩からは少し離れたところで待った。

その岩は人の丈を優に四倍はあるというのに仙道でもない姫昌がすすいと登っていくさまは年を感じさせない。よくよく考えてみれば、私もそうだが、あそこにいる主人公も年齢層はほぼ同じである。・・・なんか、微妙な心境になったから、この考えは止めよう。

少し離れたところにいる彼を見ると、ああ成長したんだなあとどこかおばさん臭い考えが過つたが、あれから六十年は経っているのだから老けたのが正解だけど、仙道はこういうときはややこしい。そういう考え込んでいると、話し終えたのか主人公がこちらを指さし、姫昌がこちらを見て微笑んでいる。無言の訴えでこちらに来いということはわかった。溜息を吐いてから、そつと地を蹴った。

ちなみにいつも白額虎に乗っているが、私も飛ばます。私の力は創造なのだから、風

を編むなり、自分の周りだけ無重力空間を作ればよいだけの話だ。しかし、今回は風を使った。こんな飛沫が飛んでくるような場所で無重力空間を作ったら自分の周りに水が浮いて鬱陶しくなる、経験で学んだ。

風で自分を運び岩の上まで飛ぶ。姫昌の隣で浮かぶが、主人公は目を見開いている。

そして、その隣の・・・カバは啞然としている。

「太公望、彼女は私の旧友であり天然道士でもある。自由な気質ではあるが、優しい御仁だ。巻き込むのは忍びないが、少なからず力にはなつてくれるだろう」

姫昌は優しい眼差しで紹介しながらこちらに向かつて微笑むが、こちらは複雑な心境である。なんとたつて、目の前の彼には出会ったことのあるのだ。まあ、その頃は呂望だったけど。

そんな複雑な心境故に黙って相手の出方を伺っているのを他所に、先に動き出したのは太公望だった。

ゆつくりとこちらに歩み寄ってくる彼は無言を貫いたままだが、隣にいた河馬は口をかつびらいたまま主人公の方をガン見している。すまない、河馬くん、面白いんだけど、君の名前は忘れていたのよ。スーパ―っていくカタカナ表記は覚えてるんだけど、漢字表記がわからないから通称カバくんで勘弁してくれ。

私は浮いているといっても、姫昌の目線より少し高いくらいだ。近づいてくる主人公

はそつと手を伸ばして私の頬に添えた。そこにどこかデジャウを感じるが、そうしてじつとこちらを見つめる視線は居たたまれない。一方、隣にいる姫昌はじつとこちらを観察していた。主人公が私に敵意がないことはわかるため、様子見をしているといったところか。

ふと主人公が納得のいったように頷くと、顔を綻ばせた。

「おぬし、拷問ではないか」

こいつの記憶力どうなってる、会っているのも60年前、しかもたった数か月だぞ。それに加え疑問形でもなく、確定でそう言った。どうせこれで知らぬ存ぜぬと言っても否定はできないだろう。

「……呂望、私は、」

「おぬし、……どこへ行っておったのだ、探したのだぞ！ 村は焼かれたが遠くに住んでいたおぬしが巻き込まれてはいないと確信しておったが、わしとほぼ同い年であるあなたが一人生きていくのは難しいと修行の間際にこつそりと探しに行ったが、どこにも居らず、殷の國中探しまわす羽目になったわ」

「はっ」

穏やかな表情が一変、険しい顔で捲し立てるように口から飛び出し、若干頬に添えていた手が顔を掴むにグレードアップしている。まだまだ言い足りないという表情の呂

望に静止をかけなければと思うが、呂望は止まらなかつた。

「どうせおぬしは自堕落に引きこもっておるとは思っておつた。親がいなくなつたと言つておつたが、その後も誰にも頼らなかつたおぬしが独りおつては儂くなるのは目に見えていた。・・・心配しておつたのだ」

その目は嘘を吐いているようには見えぬ、呂望は誰だコイツなそれはそれは優しい眼差しをしていた。それにしても、昼寝友達にここまで想われていたとは予想外である。いや、もしかしたら背伸びせず等身大でいられる彼の存在に甘えていたのは私の方で。

「ごめん、呂ぼうおう」

添えられた手は頬をつねり、真横に伸ばされる。さぞ、私の顔はギャグマンガに相應しい顔をしているであろう。ほれ、名を呼ぼうとしたが既に言葉にはならず間延びしている。彼の顔は呆れたような白々しいさをしてるが、先ほどの偽物をどこへやった帰つてこいシリアスよ。

「おぬしに謝れる謂れはない。わしが勝手にやっていたことだ」

謝罪はお気に召さなかつた様子だ。半ば戯れているように見えてきたのだろう。姫昌は微笑ましくこちらを見ており、そのカバくんは素直じやないっすね、ご主人とか言っている。・・・そういえば彼はカバじゃなくて霊獣だった、しゃべるんだな。

そうして思う存分引つ張つていて、彼の気が済んだのだろう。頬から手を離すと呂望

は目の前に右手を差し出した。その手に微笑むと私も右手を差し出した。そつと握った温かみは以前にはないものだった。

「話を戻すか。わしは崑崙の道士、太公望だ、おぬしは」

「私は黄耨曉、天然道士って呼ばれるのかな。姫昌とは友人関係と言つて差し障りないよ」

あの時からおよそ六十年、時も経て立場も変わり、果ては呼び名まで変わった。また会うことになつてしまふとはなあと感慨深く、昔を懐古ししみじみとしていた。

「やはり天然道士ではあつたか。あの年で村からも離れて住めたのも頷けるわ」
「当たり前。しつかし、六十年経つたつていうのによく覚えていたね私の事」

「金の目はなかなかおらんからの。．．．それと、黄と言つたか」

「あれ、言つてなかつたつけ」

「もしや、武成王の血筋か」

「またもや当たり前。最近発覚したよ」

「おぬし、軽いのお」

呆れた眼差しを受けたが、その武成王との初対面が殺伐としていたことを知つたら、その心情はより深いものになるだろうと思つたから知り合つた経歴を絶対話さないことを心の中で誓つた。

「……どうやら紹介せずとも知り合いのようですね」

姫昌は穏やかに言うが知り合いかあ、まあ知り合いなんだろうなあ。六十年前のだけだ。

「姫昌、心は決まった？」

「ああ、……殷を討ち、新しき国を創る。それが私の忠義であり、民にできることだ」

「そっか。なら行くこう」

そうして握る姫昌の手は、確かな老いを感じた。友として最期まで見送ることは決めた、最初に出会ったときからも覚悟していたことだ。そうして、渦中に巻き込まれることとなった。これが、私の因果であり、天命なのだろう。

キエン

結果として、太公望が西岐の城に仕えることとそしてなり、姫昌に突撃をかました武吉少年は太公望の秘書として働くこととなった。

この武吉少年は姫昌が言うようにとても真つすぐな子で母親想いだ。姫昌と私で改めて面接をしたのだが、給金を決める際に使用用途を訊くと、ほとんどを身体の弱い母のために家に入れるといったとき、私は涙腺が緩むのを禁じ得なかった。何この子、良い子過ぎる。母親のためと言う彼の言葉を、その面接中に影から聞いていた初対面で死罪を言いつけた周公旦が計り知れない精神ダメージをくらったのを私は見逃さなかった。

一方の太公望は仕え始めてからは兵士の訓練を主に見ているのだが、時々私も連れ出すのは止めてほしい。そういう私は農業や治水、工業に携わっているのだが、元々西岐にきたらそんな仕事ばかりやっていたから、あまり変わらない。

白額虎のことも紹介した。黒点虎の妹であることも教えたが、どちらかというと申公豹のことを思い出すらしく太公望は最初は苦手意識があったようだが、今では猫じやらしで戯れるくらいには仲が良い。時々、おふぎけが過ぎて引つかかかっているけど。四不

象は同じ常識人として、騎獣仲間としても仲は良好なようだ。武吉少年に至っては邪見にできるほうが珍しいだろう。

そうして、私たちは太公望と武吉少年とも交流しつつ、時は少し過ぎていった。

良い天気だなあ。見上げる空は青く透き通っている。こういう日は日向ぼっこに限るのだが、残念、私の周りはむさ苦しい集団しかいない。

「しかし意外だの。おぬしが白兵戦に強いとは」

「私の母が鍛えに鍛えぬかれたからね。十になる前に熊を狩ったのは懐かしいわ」
「おぬし、どこを指しておるのだ」

白々しい目をこちらに太公望は向ける私の周りは死屍累々、いや死んではいけないのだが、ほとんど気絶、良くても息絶えである。それ加えて肩には子猫になった白額虎もいるので、よりシニールさは増している。周囲の人物の反応はというと、太公望の隣にいる四不象に至っては怖いっスって青い顔をして怯えているが、その隣の武吉はキラキラした目をこちらに向けている。姫昌は慣れているので、いつもと変わらずといった様子である。

そういえば仙人骨があつたであろう母はそれは滅法強かつた。武成王の血縁と言われて納得するくらいには女傑だつたことを思い出す。私を産んでから身体が弱つてい

たとはいえ、鉄扇で滝を割るとなかなかお目にかかれぬ光景だったなあ。

「そういえば呂望」

「なんじゃ、というかいつまで幼少の名で呼ぶつもりだ」

「気が済むまで。で、説明したけど私の宝具使うと0か1000しかできないから、対仙道だと肉弾戦しか無理」

「確かおぬしの宝具は、造る能力だったか」

「そんな感じ。周囲の気を吸収して物質、現象をつくる宝具だから仙道の魂も気として吸収してしまう。封神することではできないから、特殊な宝具を使う仙道だと戦いにならないからね」

「わかっておる。というより、参加自体反対されそうじゃが」

「は？ 戦力増強するなら、反対意見なんてでないでしょ」

「いわゆるフェミニストがおるからのお」

遠い目をして頭を掻く太公望は何故か空を見ている。つまり、仙人界にいる人物のことと言っているようである。

「むっ」

その遠い目が何かを捕らえたようで、ついでにキーンという稼働音がする。着地点は太公望の後ろ、誰もいない空間だから放っておいたけど、着地の衝撃で太公望と四不

象は軽くふつとんだ。人の丈三倍はある丸いフォルムに某青狸のような手足に細目を書いただけのボウルを乗せて黄色いスカーフを巻いた姿は力が抜けるが、胸元の元始という文字で仙人界のものだと一見してわかった。そういえばこんなロボあったな、という原作知識でもなんじやこりやと言わざるを得ないものだった。

そんな呆れるようなロボでも武吉少年は流石は男の子というふうに興味を持つている。太公望の説明では、元始天尊の宝具ロボである『黄巾力士』というらしい。黄巾といえは漢の時代にあつた黄巾の乱からきているのだろうが、紀元前11世紀な昨今では時代を先取りしすぎではないかと頭の隅で思ったが、黙っておく。

「太公望に伝令——武成王がピンチ！　すぐ朝歌に向かえ——！！」
「何？」

黄巾力士はピポパポと電子音を鳴らしながら、無機質に伝言を伝える。こうなると携帯電話があつた平成の時代は便利だったんだと痛感する。最初はカバン並みの大きさだったらしいが、これよりはマシだろう。というか、携帯もできない。

武成王がピンチということは、彼は朝歌を去つたということだろう。人情に溢れる彼が裏切るとなると、彼にとつて大事な人が亡くなつたのか……。

「姫昌、わしは武成王の助つ人に行つてこようと思う」

太公望は姫昌にそう告げると、姫昌も同意する。そういえば、彼を極刑から庇つたの

は武成王だった。太公望は四不象に乗り、武吉は走っていくようだ。

私はどうするか。こちらには仙道はいないから置いていくのは原作知識はあるとしても置いていくのは少し不安である。でも、私の、なにより母の血縁である一族だ。少し悩んだが、その後の戦闘は大きいし、苦戦もするからついていくことにした。

「姫昌、私も彼を迎えに行くよ。たぶん、彼は一族を率いているから一人とは考えにくい。人数は多い方が良いと思う」

「そういうと思いましたよ。私は待つてますから、いつてらっしゃい」
「うん、いつてきます」

白額虎に大きくなつてもらい、それに乗る。ちなみに余談だが、跨るのではなく横に座る形だ。二人に少し遅れて空を駆けると、ふと薄くではあるが懐かしい気配がした気がした。それは朝歌の方向からするようだった。

「賈氏……」

その少し前に紂王との対決で敗れ倒れ込む黄飛虎が妻の名を呟くと、その傍らにそつと束ねられた黒髪と耳飾りが置かれた。その気配に飛虎は目を向けるが、その緑のような靄はふと笑つたように思えると風に掻き消され見えなくなつた。

艶めく黒は汚れすらなく、飛虎の傍らに寄り添うようにいた。その髪と耳飾りを掴むと飛虎は立ち上がり、その場を後にした。緑の靄はそつとその背中を見送ると西を見つめた。

「我は見守っておるよ」

それはそう言うと言泡のように薄らぎ、空気に溶けてしまった。その微かな気配に反応するのは二人いたが、逢うのはまだ先の話である。

オツテ

よくよく考えてみよう。

私の白額虎は、最強霊獣と名高い黒点虎の妹である。

その霊獣に乗った私が、太公望を乗せた四不象、武吉少年と共に全速力で駆けるとどうなるか。そう、私と白額虎の独走状態、哀れ四不象の僕の立場が——っという嘆きが遙か後方に聞こえる。その声に振り返りつつ微妙な気持ちになる私たちであった。

「……………なぜか罪悪感を感じます」

「大丈夫、彼はそのうち身の内に秘める真の力を開放するから」

「そうは見えませんが」

こうして話している間も私たちは風を纏いながら空気抵抗なく進んでいるため、およそ新幹線並みのスピードはでているだろう。……空間転移を除いて最速なんじゃない、白額虎。

そんな思いに浸っていると、朝歌から西岐に至るまでの最初の関所である臨潼関が見えてきた。そういえば、以前にも難民救出のためこの関所で騒ぎを起こしたと太公望から聞いたが、不憫に思えてきた。西岐に至るまでの五つの関所の中の一つに謎の同情を

覚えていると、関所の方角から封神される魂魄が飛んで行った。その合間を見ずに破壊音も響いてくる。

「急ごう、白額虎」

「わかりました！」

さらにスピードを上げると関所の門の上に人影が見え始めた。

あれは・・・妖怪仙人か。原作だと三人いたはずだ。さっきの魂魄がその一人だと考えると残りは二人か。確か人質もいたはずだ。

「このまま特攻するかな」

「ちよつと待つさ」

下から声が聞こえて視点を下げると、ものすつごいスピードで地を駆けるノースリーブがいた。それは見覚えのある色合いのである黄色いスカーフを額に巻いて、親近感のわく短い黒髪、鼻頭にある傷跡が印象的な青年だった。

「俺たちは黄天化。見た目と口ぶりから味方と思うけど、道士っすか」

「・・・いわゆる天然道士って奴です。私が袴暁で、こっちは白額虎。西岐の味方でいまから黄一族の助太刀に行こうと思ってます」

一瞬、姓も言いかけたがこの場で血縁関係があるってわざわざ言わない方が良い感じがした。

「目的は一緒さ。それにしても」

「なに？」

「なんかお袋に似てるさ」

「二カツと笑うと、先に行つてくるさと言ひ残して臨潼関まで駆けて行つた。

「仙道つて私になに求めてるんだらう」

「すみません、私にもわかりかねます」

「そうして、天化を追いかけたらどうやらご老人が人質として捕まっていた。その人物が原作通りならご老人は従兄弟である。私も七十歳超えているから、正直妙な気分ではあるが、果たしてカミングアウトしても良いのか考えるくらいには、仙道とはややこしいものである。」

「そうこうしているうちに、天化が妖怪仙人一人を討ち果たした。はやいな、おい。」

「よお、おやじ元気にしてたかー！ーっ！ーずいぶんフケたなー！ーっ！！」

「第一声がそれはどうかと思うわ」

「シリアスな雰囲気か台無しですね」

「俺つちはいつもこんなもんさ」

「その声にうるせーと叫び返す飛虎なので、ある意味似た者親子なのかもしれない。」

「そのやりとりで呆れていると、残党である妖怪仙人が天化に向かつて槍と突きつけよ

うとしたが、天化はひらりと宙返りで躲しつつ、手に持つ莫邪の宝剣という名のビームサーベルで敵の背後から切りつけた。その敵の身から魂魄が飛んでいくが、これを目にした太公望が活躍の場を失ったことを知り、無表情のなかに哀愁を漂わせるところまで思い浮かんだ。

その天化が関所の上からふわりと飛び、黄一族のもとへと向かった。それにしても、せめて自分のお爺さんを縛っている縄くらい外していけよと思うけど、それは私が引き受けた。

「えっと、縄外しますね」

「すまない、年はとりたくないものだ、お嬢さんに助けられるとは。．．．私は黄滾という」

静かに笑うナイススタンディーなおじ様は、口髭を携え、面立ちは息子の飛虎に似ている。この人が母親からみて甥っ子だと思うと感慨深いものである。さて、名乗られた方には返答すべきだが、姓を言うと確実にばれる。かといって、偽名を言うのも何か違う。多少は悩んだが、ここは素直にいうべきだと腹を括った。どうせ、飛虎から言われるかもしれないが、自分が言った方がダメージが小さい。

「私は、黄昀暁と言います。あの、」

「．．．．．予想が正しければ叔母様の娘さんじゃないか」

自分の見た目から精々母の孫か血縁といわれるかと思つたので少し驚いた。

「はい。この見た目は仙道なので……」

「そうか。生きて叔母様の娘さんに会えるとは。亡き父も心配しておつたよ」

会えてよかった、と私の頭を優しく撫でながら飛虎と似た喜色を漂わせて笑む様子に、私の中の枯れ草が歓喜した。

なんだ、この包容力。

飛虎のような元気を分ける感じでもなく、太公望のようにいつもそばにいる空気（この時太公望のほつとけといじける声が聞こえたが気のせいだ）のような感じでもなく、人生経験を踏まえた（主人公と年齢はほぼ同一ですby作者）余裕のある雰囲気は私の氣づいていなかった一面を開花させていた。

そんな謎のトキメキを感じていると砦の下にいる一行が一点を見ていた。

「太公望どの!!」

「おお、武成王ではないか！偶然よのう!!」

「御主人……」

やっと追いついたであろう太公望の言いように四不象がなにやらワザとらしいと太公望に言いたそうだが、黙っている。横にいる白額虎はなにやら同情めいた視線を寄こしていた。頑張れ、主人公。

そう考えているうちに、下から上がってきた黄一族がここにたどり着いたようだ。貴女は、と言われるが苦笑して皆から飛び降りた。正直、仙道にとつてこれくらいの高さはわけないのである。説明は年長者に任せた。そういうところは叔母さまに似ているな、と微かに聞こえたが気にしないでおく。

黄飛虎、天化、太公望のもとに降り立つと、彼らへの挨拶をそこそこ太公望は急いでここを出ようと提案する。なんでも、姐己の手下は打倒したが次は黄飛虎のライバルというべき聞仲の追手が来るとのこと。

聞仲かあ、最強の一角で殷の初代皇后に初恋を拗らせ、その遺言を守っている殷の守護者ともいえる存在である。

「——急いでこの臨潼関を向けるのだ！ む？」

崩壊した臨潼関の門に二人の人影が見えた。見たところ、二人とも修行僧のような恰好をしている。

「むう。言つた矢先にこれか！ 姐己も聞仲もそつがないのう！」

「私は張桂芳」

「私は風林」

「聞仲様の命令によりここで足止めさせて頂く」

ところで、名乗りは良いのだが、武蔵坊みたいな恰好の人の数珠はともかく、片方の

人のメガホンはもう少しどころにかならなかったのだろうか……。

シカク

「聞仲配下の金鰲きんごうの道士か」

金鰲列島とは、元始天尊が率いる崑崙山脈と対をなす仙人界でのライバル的存在である。金鰲列島を率いているのは聞仲ではないが、仙道が慕うだけのカリスマ性が聞仲にはあるということだろう。

「金鰲とは流派が違うゆえよくはわからぬが・・・」

そう呟いて太公望は黄天化にぼそぼそと内緒話をし出した。それを聞きたそうにしている四不象、その頭には子猫になつている白額虎が乗っている。なんとなく彼に乗っているようだが、この場合四不象は太公望に訊くのではなく、白額虎に訊く方が有意義だ。だって彼女は順風耳持ち、要は地獄耳なのだから内緒話など筒抜けである。三里先の水が落ちる音も聞こえるらしいので偵察にはもってこいな能力である。

そして、金鰲島所属の張桂芳、風林は黄飛虎が朝歌を裏切った事実が信じられないらしい。どうやら黄飛虎の家族についての情報は広く回っていないようだ。彼女たちは姐己の傀儡である紂王に間接的であれ殺されたようなものだ。忠義を示していたにも関わらず、裏切ったのは朝歌であるというのに。王制ってメリットもあるけど面倒くさ

い。そうこう話しているうちに、太公望が先陣にたつ。

この打神鞭も活躍を望んでいるといっているのに炎の男爵つて名乗るのは、果たして本気なのか自分は火を操るぞと故意にアピールしているのかどちらだろうか。

「御主人がこわれたっす」

「主さまはどうでも良いこと考えていますね」

騎獣コンビがなんか言っているが、無視だ無視。

「太公望よ動くなっ!!!」

という張桂芳の一声で太公望は静止。次に風林が持つ数珠の一つがパ○クンのように巨大化して太公望が捕らえられた、以上。

どうやら捕獲系の宝貝で『紅珠』とメガホンは音波で呼ばれた者の動きを止める『呼名棍』というらしい。続いて、太公望の裏切りで四不象が捕らわれた。そして、彼の頭に乗っていた白額虎は冷めた目を向けていた。

「主さま、太公望さまに付いていくのが不安になってきました」

「大丈夫、たぶんこれからもっと不安になっていくから」

「それ、大丈夫じゃないです」

次いで名が知れている黄家一族の名前が呼ばれて、捕らわれていった。さて、残っているのは私と武吉くと、彼である。武吉くんは持ち前の足の速さがあるので『紅珠』か

ら逃げ回っている。そして私はというと、立っているだけである。

「寶貝の力は仙道が使う氣に屬性を付けて方向性を与えるもの。なら『生成する』私の『卦源魄』を使ってその方向性を変えれば問題ないです」

前から迫ってくる『紅珠』から氣を奪い花卉に変えて、ただの数珠にしてしまう。ちなみに寶貝と言っているが、実際はただの能力なので形はない。まあ、私の氣の塊を七芒星の髪飾りとして形骸的に寶貝として使用しているので、どこかの寶貝オタクに研究されない限りはバレないだろう。花卉にした理由は自然に還るしなにより無害だ、見た目も綺麗だしね。名前も適当だ。

そうこうしているうちに風林が桂芳に向かって、秘湯混浴刑事エバラと言いて、それをメガホン寶貝『呼名棍』を使って風林が復唱するという謎の行動に出た。どうせ太公望の嘘を鵜呑みにしたと思うのだが、何故それを名前と思いきんだのかがわからない。彼らは天然なのだろうか。たぶん私の名前を聞かれないのは動かなくても力を使える」と判断されたためだろうが、「あの女のことは放っておこう」とは酷い。

太公望のマルヒアイテムである居眠り用強力耳栓を使い、難を逃れた彼こと黄天化も、『紅珠』に挟まれそうだった武吉くんを庇っていた。その二人にそつと近づくと、武吉くんは嬉しそうに笑った。

「禱曉さんも無事だったんですねっ！」

そのピュアさをどこかのじいにも分けてほしいものだ。

「構……いや俺っちの身内だから姉貴って呼ぶさ。だがよ、これはまずいべ。あれだけ人質にとられちゃこっちから手をだせねえさ」

「あー、たぶん大丈夫ですよ」

「何故さ」

「向こうの空から何か飛んできてます」

指差す空には確かな飛行物体が、って何か両手で構え始めた。気配的に宝具なのが、植物っぽい感じもする不思議人物は敵か味方かもわからないが、原作通りなら宝具人間の彼だ。

「衝撃に備えましょうか」

三人と一匹を囲うように円形の水のバールを作り出すと、案の定不思議人物の両手から衝撃波が放たれて臨潼関の関所が音を立てて半壊した。土煙もある程度離れたここにも押し寄せたが水のバールが防いでいる。

「な、何事ですか!?!」

「豪快さ」

「あの関所は呪われてるんでしょようか」

上から武吉くん、天化、白額虎の順だが、武吉くんは兎も角、天化は人物を予想して、

白額虎はその能力のせいだろうか、この関所で起こったことを見ていたらしい。

「ぜんぶ破壊する!!」

「物騒だなあ」

そんな雰囲気の中、不思議人物の声に呑気に反応してしまった私は悪くないだろう。緊張感? そんなの皆無です。

ナタク

「えーっと、あいつ味方さ？」

「僕もあつたことない人です」

「まあ、少なからず敵ではないんじゃないかな」

攻撃対象はこちららではないので、姐己や聞仲の手下ではない。しかし、問答無用で攻撃とは、好戦的すぎやしないか。まあ、おかげで膠着状態からは抜け出せそうだけど。

「ナタク動くな!!」

メガホン宝貝持ちの林桂芳が彼に向かって言う。やはり、彼はナタクのようだ。リークは太公望だろう。ナタクと呼ばれた彼は赤い髪を鋼のヘッドギアで逆立てて両手足は宝具で『乾坤圈』と『風火輪』、腰布は『混天綾』だったか、あと背中に『金砖』と『火尖鎗』を備えている。・・・一人で戦争でもしに行くつもりなのだろうか。

「・・・何の遊びだ？」

メガホン宝具『叫名棍』は効果がないようだ。“ヒト”ではないから効かないのだろう。・・・よく考えれば私も名前を呼ばれようが、耳元に真空を作れば問題ないと思いついたが後の祭りである。それはさておき、ナタクの先制攻撃でメガホンを破壊したと

思ったが、次は『紅珠』に捕まった、ばくつと捕まったのである。

「あらまー」

「ああっ!!」

「あつさり捕まりましたね」

上の黄天化と武吉くんはともかく、白額虎ちゃん、なかなか辛烈なコメントで。といつても、たぶんこの中ででの攻撃性は随一である彼はこれくらいでは捕縛は無理だろう。案の定、『紅珠』の一つが破裂して風林が余波に巻き込まれて封神された。

そして、余波は敵のみでなく背後の城壁までも巻き込んで、崩れ始めた。元々ボロボロだった城壁にとどめを刺した形だ。あれだ、城壁のライフはもうゼロよ、とでも言えばよいのだろうか。そして、そこには下敷きになりそうになる『紅珠』があった。

お師匠様!!、と飛び出していく武吉くんは真つすぐ『紅珠』のもとに向かっていく。

「アレは武吉くんに任せても良さそうね」

「じゃ、俺たちはあつちに行くさ」

そう言つて、黄天化はこっそり移動してナタクの背後から襲おうとする林桂芳をぶつた切つた。・・・私、やることなくないですか。

「まあ、主さまはどんと構えていれば良いと思いますよ。まだ序の口でしょうし」

「姐己は兎も角、聞仲相手だとそうだろうね。戦力はまだまだ多い」

西岐の方角をみる白額虎には、次の刺客が見えているようだ。あえて皆に教える気はない。どうせ、その方向に向かわなければ西岐へはたどり着けない。

そうして敵を倒した天化はそのまま『紅珠』を切り、仲間たちを解放していく。つて、ナタクがこつちというか、天化を見つめている。

「もういいだろう?」

「何のことだ・・・?」

太公望が訊くと、天化はどうやら好戦的なナタクに因縁をつけられて喧嘩を売られたらしい。それを素直に買う天化も十分好戦的だが。太公望は戦いだす二人を尻目に呆れている。

「うう・・・、こやつらを一つにまとめるのは一苦労やものう」

「心底同情するわ、太公望」

「おぬしも手伝え」

「い・や」

むしろ私では標的がこちらに向くだけだろう。そうしていると、黄一族の方から一際小柄の姿が出てきて戦闘民族二人組のもとへ走り出した。

結果、天化の末の弟である天祥くと武吉くんが、ナタクに懐きました。ナタクのことをただのマザコンではと漏らす太公望、たぶん正解。ああ、そういえば忘れてたわ。

「武吉くん」

「はい、どうしました禱曉さん？」

「はいこれ。さつき瓦礫が額に当たったでしょ。血は止まつてるみたいだけど拭いておいて」

渡したのは水を湿らせた手ぬぐいである。先ほど、崩れる関所から『紅珠』を庇った際に額を切ったのは見逃さなかつた。ありがとうございます、と丁寧な親切心を受け取る武吉くんはええ子やと老婆心を滲ませていると、視線に気づいた。

「えっと、ナタクだっけ。何か用？」

「・・・お前、なんだ？」

質問に質問を返されるとは斬新である。何だとはなんだと返したいが、彼が欲しいのはそういうことじゃないだろう。なんせ彼は蓮の花の化身で宝具を埋め込まれているある意味、一番宝具に近い存在だ。

「私は黄禱曉。黄一族の血縁で、太公望の同郷、天然道士よ」

「そういうことじゃない」

彼は確かにイラついているようだが何故か敵意を感じない。それに苦笑をした。

「俺は、お前殺せない。何故だ」

「難しい質問だけど、それは判らない」

「……………」

「とりあえず、敵じゃないことはわかってほしいな」

逆立つ赤髪をあやすように撫でると、ぷいっとこちらから視線を外した。どうやら許してくれるらしい。なんか反抗期な弟を持った気分である。

「……………もしや女に弱いのか？」

「御主人、男は誰しも女に弱いもんっス」

「おぬし、なに悟りを開いているのだ」

シセイ

そこからの道中は順調に何事もなく済んでいた。特に刺客がくることもなく、黄一族と太公望たちは雑談を交えつつ西岐を目指していた。

そこで、太公望がこれまでことごとく捕縛されていたこともあり、強さへの疑惑が黄一族に流れたが、まあ些細なことだ。それよりか、黄一族最年少の天祥がナタクに乗って空中遊泳を楽しんでいるのを見て、ライバル心を抱いている白額虎の方が面倒くさい。

「私でもあれくらい・・・」

「いや、対抗心抱く必要ないから。また今度の機会に乗せてあげればよいでしょ」

たぶん、西岐での生活を思い出しているんだろう。姫昌の子供たちとよく遊んでいたせいか子供が好きなようだ。ただ動物好きな周公旦には撫でられすぎて若干苦手意識はある。あのこわもてが満面の笑みを浮かべるもんだから、兄である姫発は気味悪がっていたな。思い返していると、そっと天化が近づいてきた。

「そういえば・・・えつと姉貴」

「慣れないなら痔瘻でいいわ。身内だと気づいたのもかなり最近だし」

「いや、俺つちの家系は男ばかりで慣れないだけだから気にしないさ。それより、師叔と仲良いみたいだけど、なんか縁でもあつたさ？」

「ああ、太公望が仙界に行く前にね」

「だから会つたことがないのさ。見た瞬間は仙人かと思つたけど、実際は天然道士だったさ」

実は気になってたさとニカリと爽やかな笑みを浮かべる天化は、お礼を言つてからお昼ご飯を食べる黄一族へと混じつていつた。まあ、修行していないのに宝貝持っているなら怪しいか。まあ、実際宝貝じゃないしね。

そうこうしていると、太公望のこの辺で仕掛けてくるだろうの言葉に乗っ取り、偵察に行つていた武吉くんが帰つてきた。明らかに走る音以外の音も連れて。

「あ……、津波だ——っ!!!」

言おう、ここは山岳地帯である。海のないここで人の背のゆうに十倍はある津波なんて宝貝くらいしかないだろう。高台にいた太公望と武吉、飛虎と空にいる年少組となんとなく白額虎に乗つた私以外は波にさらわれてしまった。

「ぼくみんなを助けます！」

「助けるつておぬしこの激流では……」

「大丈夫です！ぼくライフセイバーのバイトやっていましたっ!!」

そうして、激流もなんのそので泳ぐ武吉くんに私は声を大にして言いたい。内陸の西岐のどこでそんなバイトやってるんだっ!?

で、現れたの法師風な男性に水晶を持ったサラ髪、玉に乗った少年に影薄い人の四人組である。どうやら九竜島の四聖と言う聞仲からの刺客らしい。どうやら、名誉を挽回するべくナタクではなく太公望が先陣を切るようだ。

まあ、そんなことよりもここは西岐から目前の場所だ。原作知識は曖昧だが、彼らの目的は私たちの抹殺だけではないだろう。何も言わないでこの場を去るのはどうかと思うが、四聖相手なら私以外で事足りる。以前使った姿を消すオリジナル宝貝である隠形包を使うと、意図を読み取ったのか白額虎は何も言わずに西岐へと進んだ。

以前と変わらず活気あふれる西岐は、端の山岳部の区域であっても賑わいがあった。ある種の家族経営な国家状態だが、それぞれ得意分野にわけているおかげか民の生活は安定している。その様子に微笑ましく思うが、今はそうも言ってられない。

「さて、私は私の仕事をしますか。サポートよろしくね、白額虎」

「はい、主さまー」

インネン

ということまで西岐の上空まで移動したわけだが、途中なんだか楽しそうにしてる申公豹とすれ違った。寶貝のおかげで気づかれなかったが。・・・確かこの後、四聖が西岐を襲うということを聞仲に伝えに行ったはず。なら邪魔するわけにはいかない。

「申公豹さまはなんかウキウキされていて気づかれませんでした、兄さまは気づいたみたいですね」

「え、そうなの？」

「目が合いました」

あー、千里眼で空間のズレでも把握したか、あるいはシスコンゆえか・・・。

「気味の悪いことと思わないでくださいね、主さま」

そういう君は心を読まないの。

さて、西岐についていたのでとりあえず姿を現してから結界を張る。ただ、範囲が広すぎるため薄くしか張れない。考えてもみて、一画とはいえ覆うとなるとまあ直径10 kmくらい。十分厚く張ろうと思うと、さすがに自分の気だけじゃ無理だから周囲の気も使うと、今後の西岐の農作物とかに影響がでる。たぶん周囲は当分枯れた大地になるだろう

な。チートといつても規格は天然道士だ、できないことはある。

「すみません、主さま。少し揺れます」

「わかった」

白額虎の言葉に疑問も持たず返事をする、白額虎の目の前は振り下ろされた三叉の槍。敵対されないために姿を現したのに意味なかったかな。まあ、当てようとは思ってなかつたようだが。

「結構やるようじゃな。いや、すまん。敵ではないのだが」

すぐに槍は引かれたが、白額虎はいまだに敵意むき出しに目の前の太公望に唸っている。乗っているのは四不象ではなく犬の騎獣、鞭ではなく三叉の槍を携えた太公望。うん、騎獣に跨るのではなく腰かけているので違和感満載。たぶん太公望なら腰かけるのであれば足組んでそうだな、とかどうでもいいことを考えてしまう。

「いえ、大丈夫です。確かに突然現れたらびっくりしますよね」

先ほどまで隠蔽の宝具を使っていたのだ、彼からすれば忽然と西岐の上空に現れたのだから警戒もする。敵じゃないと認識したのも、西岐で私のことを聞いたのだろう。自慢ではないが、私の様相は西岐の民の大半は知っているだろうし。

「どうやらわしのごことは知っておるようじゃの」

ええ、太公望はあなたのことをフェミニストとかおっしゃってました。とかいうとや

やこしくなるから無言で首肯する。

「そなたはそのまま結界を張っておいてくれ。わしは向こうにいくとする」

そう言つて向かう先にはこちらに向かつてくる、えつと頭に笠をかぶつたマント姿な人物。特徴があるのはありがたいが、やはり仙道は個性的すぎる人物が多いな。

太公望が四聖の一人に話しかけると太公望はその姿を一変した。青い長髪に女性と見紛うばかりの顔に服装も変わる。

「あの方は、まさか楊戩さまですか？」

「知ってるの、白額虎」

騎獣であり、基本仙界に関わりのない白額虎が知っているとは。いったい何処で聞いたのやら。

「兄さまがある種の危険人物とおっしゃつたので覚えています。なんでもあまねく女性を不治の病へ陥れる魔性をお持ちだとか。敵ではないようですが、危険ですので下がつてくださいなね主さま！」

・・・黒点虎、あんた純粹な白額虎になんてことを。不治の病イコール恋に結び付けないから、いらぬ誤解を招いているよ。というか、たぶん白額虎に言いたかつたんだろうな、仙道と神獣なだけ。まあ、面白いから誤解したままでよいけど。

私たちより上空にいつ楊戩たちの会話からして、あの笠をかぶつた人物は聞仲の配下

である九竜島の四聖・王魔と言うらしい。それにしても聞き捨てならない、西岐を滅ぼす——なんて。なんのために私がここにいると思つていいのか。

町の端にある山に王魔の操る宝貝がぶつかると爆発が起きる。山の先端ごと轟音を立てながら町の方に崩落していく、が結界と接触する時が遅くなつたように落下がゆるやかになつていく。本当なら遮断したいとこだが、この薄さならここまでが限界だ。その様子を身構えた住民たちは不思議そうに見ているが、ゆつくりと巨大な岩が落ちて家屋が削れていくのを見ると早々に避難を始めた。怪我人は出るかもしれないが、民の犠牲は回避できるはず。

「私は避難誘導に徹するので、ここはお願いします」

「わかりました。なるべく被害は最小限にとどめるのでお任せします」

その楊戩の言葉に王魔は激昂するが、わかりやすい陽動である。

西岐の町に降り立った私は家屋に逃げ遅れた人がいないか走り回ることになる。遠くからある威圧感を感じていたが、でもここで動かないと私は守れない。走りながら家屋の下敷きになつて身動きのとれない人や重症の住人の怪我を治していく。

すると、いくつか上空で爆発が起きていたが、途端に止み戦闘をしていた二人が移動していく。それと同時に大気が震えていることを肌で感じとれた。

「来たわね」

「はい、ここより山岳地帯の方角、太公望さま達の元に」

やってきた相手は聞仲で確定だが、まさかここまで圧倒的とは。漏れ出る気で大気を揺るがすとかどこかの戦闘民族じゃあるまいし。

「どうされますか、たぶん太公望さまたちでは・・・」

白額虎の言う通り、今の太公望たちでは太刀打ちできない強さである。原作でもこの出来事は重要であり、敵である聞仲を印象付けるものでもある。私が介入しても防衛しできないし、たぶんなにか変わるといっわけではない。西岐の民に犠牲者はないが負傷者は多数に上るし、太公望たちのことは敵ながら義理堅く見逃してくれそうな見込みもある。

ただ、このまま聞仲とは接触せずにいることを考えるとなんとなくわだかまりを覚える。思い出すのは剣を抱えて泣き崩れる母との約束。

——どうか、どうか私のようにならないで。ただ守られて逃げただけの、なにもできなかつた私のように——

ああ、本当に好きだったんだな、父のことが。思い出して苦笑すると、白額虎に全力疾走してもらおう。さて、因縁に会いに行こうか。70年前の、父の仇ともいえる人に会いに。